

## 第2章 昭和54年度山口大学構内の発掘調査

### 第1節 吉田構内理学部校舎新営に伴う試掘調査

#### 1 調査の経過

新営予定地は第1章で述べた、人文学部校舎新営予定地の北西約80mに位置する。新営建物は2棟で、その面積は約1060㎡である。調査対象地域一帯は東から西へ延びる標高約25～30mの洪積段丘が、新営予定地の東側を南北に走る構内循環道路付近で階段状に造成され、標高約20mの平坦面を形成している。人文学部校舎新営に先立つ試掘調査では近世のものと考えられる柱穴状の掘り込みを検出しているが、トレンチ内の土層の堆積状況、遺物の出土状態は周辺一帯にわたる後世の大規模な削平を暗示するものであった。

調査は遺構の有無を確認するため新営予定地内に幅3mのトレンチを4本設定して行った。調査にあたっては人文学部考古学研究室の協力を得、構内造成等による埋め土は機械を使用して除去した。調査期間は昭和54年6月11日から18日までで、調査面積は216㎡である。

#### 2 調査結果

##### Aトレンチ

西側建物の中央部に、南北方向に設定した幅3m、長さ20mのトレンチ。地表面下約20～40cmで人文学部校舎新営予定地のAトレンチで地山と認定された黄橙色粘土が検出された。しかし、検出面では不純物を多く含み地山と判断し難いことから、部分的にトレンチを設定して掘り下げた。その結果、不純物が含まれるのは検出面から約20cm下位までで、同層はごく最近の土器を包含していることが判明した。したがって、同層は周辺地域の地山の削平に伴う客土で、不純物を含まない黄橙色粘土以下を地山と判断した。なお、トレンチ内での遺構、出土遺物は皆無であった。

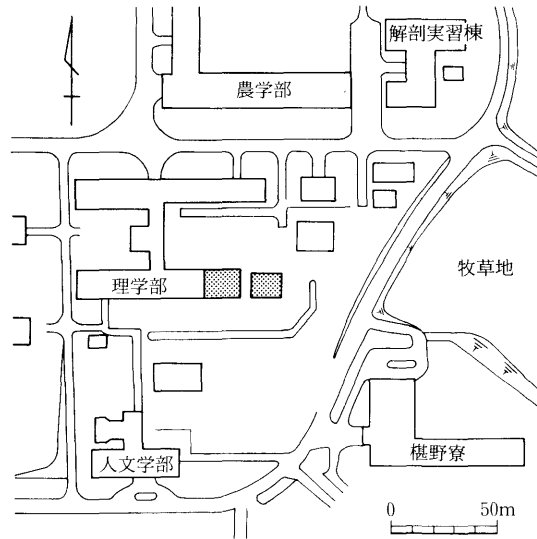


Fig. 58 調査区位置図

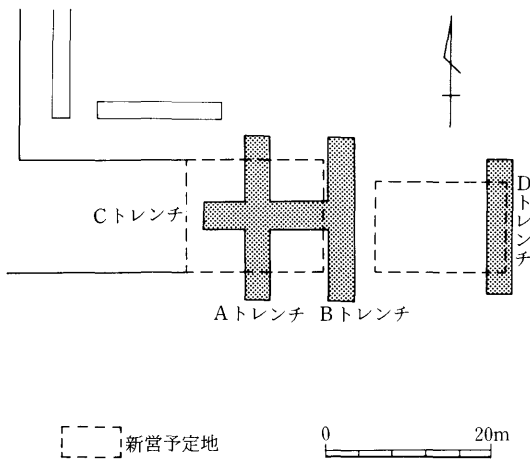


Fig. 59 トレンチ設定図

### B トレンチ

2棟の校舎間に、南北方向に設定した幅3m、長さ19mのトレンチ。層序的にはAトレンチと同様で、地表面下約10cmで層厚約20cmの地山の客土である黄橙色粘土の堆積が認められ、その下位が地山であった。遺構、遺物は認められなかった。

### C トレンチ

西側建物の中央部に、A・B両トレンチと直交して東西方向に設定した幅3m、長さ16mのトレンチ。層序的にはA・B両

トレンチと同様で、地表面下約15～25cmで層厚約10cmの地山である黄橙色粘土の客土が認められ、地山へと続く。遺構、出土遺物は皆無であった。

### D トレンチ

東側建物の東端部に南北方向に設定した幅3m、長さ17mのトレンチ。層序的には他のトレンチと同様で、地表面下約30cmで層厚約5cmの地山である黄橙色粘土の客土が認められる。その直下が地山であるが、遺構、遺物は認められなかった。

## 3 調査結果

各トレンチの土層の堆積層順は極めて単純で、構内造成による埋め土の直下が黄橙色粘土の地山である。地山は標高約20.1mで検出され、地表面からわずか30～40cm下位である。また、各トレンチ相互での検出面の高低差はほとんどない。人文学部校舎新営に伴う試掘調査の所見では、構内造成に伴う埋め土は地表面下約0.8～1mまで厚く客土されており、旧表土、旧水田耕作土を介して地山に達している。このことから、調査地域はその東側に存在する東から西へ延びる洪積段丘の頂部付近が大規模に削平されていることが予想される。したがって、過去に遺物包含層もしくは遺構が分布していたとしてもすでに消滅している可能性が高い。

[注] 1) 河野通弘・高橋英太郎「山口大学とその付近の第四紀層」(『山口大学教育学部研究論叢』第27巻第2号、1977年)。

## 第2節 吉田構内農学部動物舎新営に伴う試掘調査

### 1 調査の経過

新営予定地は第1節で述べた理学部校舎新営予定地の北方約70mに位置する。調査対象地域一帯は東から西に延びる標高約25～30mの洪積段丘<sup>1)</sup>が、新営予定地の東側を南北に走る構内循環道路付近で階段状に削平され、標高約20mの平坦面を形成している。同一平坦面の南側に位置する、理学部および人文学部の各校舎新営予定地での試掘調査の所見では、顕著な遺構、遺物は認められず、この平坦面は本学統合移転前の水田開作および構内造成によって、地山が大規模に削平された結果であることが明らかとなっている。

調査は遺構の有無および地山の削平状況を確認するため、南北に隣接する2棟の新営建物予定地内に、それぞれ幅3mのトレンチを1本ずつ設定して行った。構内造成等による埋め土は機械を使用して除去し、その後は手掘りを行った。調査は人文学部考古学研究室の協力を得て、昭和54年7月2日から6日まで行った。調査面積は96m<sup>2</sup>である。

### 2 調査結果

#### A トレンチ

北側の建物予定地内の中央部からやや北寄りに、東西方向に設定した幅3m、長さ23mのトレンチ。構内造成による埋め土は、地表面から東側で約60cm、中央部で約80cm、西側で約110cm下位まで厚く客土されている。東西両端部ではその下に層厚10～20cmの砂礫層が堆積し、黄橙色粘質土の地山に至る。砂礫層は湧水し、遺物は包含していない。トレンチ中央部付近は後世の削平が著しく、埋め土の直下が地山である。地山面の標高は、東部で約19.9m、西部で約19.5mで、地山は東から西へ向かって緩やかに下降する。遺構は認められず、トレンチ中央部付近で本学統合移転前の旧水田に伴う暗渠1条を検出したにすぎない。

遺物は同じくトレンチ中央部付近で、



Fig. 60 調査区位置図

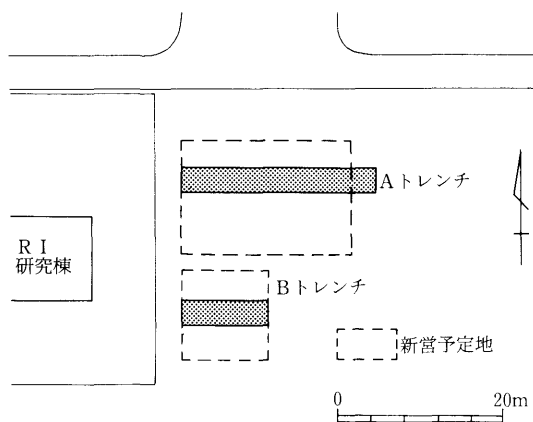


Fig. 61 トレンチ設定図

地山に貼り付いた状態で須恵器小片1点  
が出土した。

### Bトレンチ

南側の建物予定地内の中央部に、東西  
方向に設定した幅3m、長さ9mのトレン  
チ。構内造成による埋め土は、地表面か  
ら東側で約70cm、西側で約90cm下位まで  
厚く客土されている。その下位は直接黄  
褐色粘質土の地山となる。Aトレンチで  
検出された砂礫層は認められない。地山

面の標高は東部で約19.7m、西部で約20.1mで、Aトレンチ同様、地山は東から西に向かっ  
て緩やかに下降する。遺構、出土遺物は皆無であった。

### 3 小結

検出された地山は本学では弥生時代以降の遺構の掘り込み面と同一の色調、組成であり、  
立地的にも当該期の遺構が分布する可能性が十分にあった。しかし、試掘調査の結果、建  
物新営予定地内では顕著な遺構、遺物は認められなかった。南側の建物新営予定地では埋  
め土の直下が地山であることや周辺の地形がかなり変容していることなどから、調査地域  
一帯は過去に本学統合移転等に伴う造成による大規模な削平が行われたと考えられる。

新営建物北側のAトレンチで検出した、地山直上に堆積する砂礫層の性格は不明確であ  
るが、検出面の標高がBトレンチの地山面の標高とほぼ同一であることから、南側から北  
側に向かって下降する谷状の落ち込みへの堆積物と考えられる。また、地山に貼り付いた  
状態で出土した須恵器はかなり摩滅しており、周辺の高位、とりわけ調査地域の東側に位  
置する附属農場の牧草地からの流入品と考えられる。附属農場の牧草地では遺物包含層は  
認められなかったが、古代から中世にかけての柱穴群や溝などの遺構が検出されており<sup>2)</sup>、  
今回出土した須恵器は、構内造成によってこれらの遺構から遊離し搬入された可能性が強  
い。

今回の調査地域周辺では、昭和53・54年度に人文学部校舎新営予定地と今回の調査地域  
間ですでに2件の試掘調査を実施している<sup>3)</sup>が、各調査地点とも顕著な遺構、遺物は認めら  
れていない。各調査地点の土層の堆積状態や現在の地形・土地利用の状況から、東側に位  
置する標高約25～30mの洪積段丘の西への延長部分が、各調査地点付近で構内造成によって

吉田構内農学部動物舎新営に伴う試掘調査

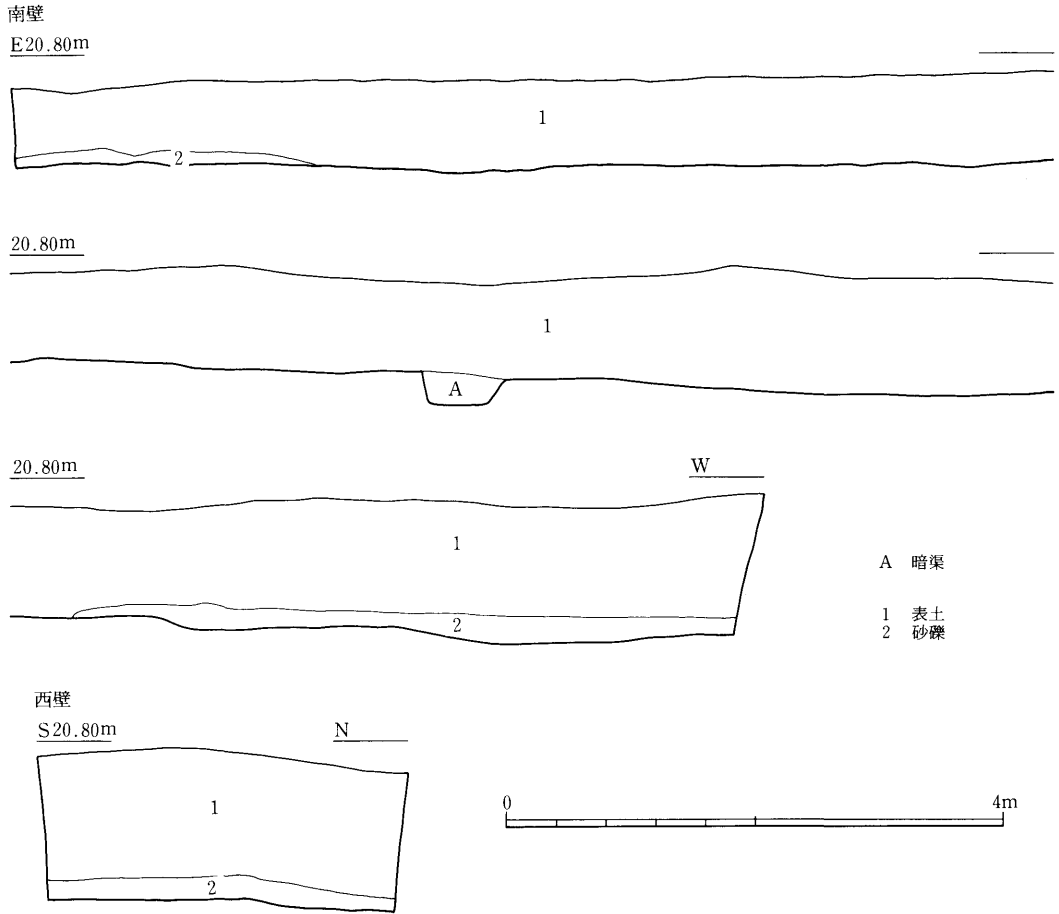


Fig. 62 Aトレンチ土層断面実測図

削平されたことにより、過去に遺構が存在していたとしてもすでに消失している可能性が高いことを示していると考えられる。したがって、少なくとも各調査地点以東、構内循環道路間の地域には埋蔵文化財の分布は極めて希薄であると判断される。

[注]

- 1) 河野通弘・高橋英太郎「山口大学とその付近の第四紀層」(『山口大学教育学部研究論叢』第27巻第2号、1977年)。
- 2) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)。
- 3) 付篇Ⅰ第1章、第2章第1節参照。